

平成 17 年度

北嶺中学校入学試験問題

国 語

(注意)

- 1 問題用紙が配られても、「はじめ」の合図があるまでは、中を開かないでください。
- 2 問題は全部で **4 枚** で、解答用紙は 1 枚です。「はじめ」の合図があったら、まず、ページ数を確認してからはじめてください。もし、ページがぬけていたり、印刷されていなかったりする場合は、静かに手をあげて先生に伝えてください。
- 3 答えはすべて解答用紙の指定された解答らんを書いてください。
- 4 字数が指定されている場合には、特に指示のないかぎり句読点も数えてください。
- 5 質問があったり、用事ができた場合には、だまって手をあげて先生に伝えてください。ただし、問題の考え方や、言葉の意味・読み方などについての質問には答えられませんので注意してください。
- 6 「おわり」の合図で鉛筆をおき、先生が解答用紙を集めおわるまで、静かに待っていてください。

主人公の奥田克久は、吹奏楽部所属の中学三年生である。彼は、ある日、本屋でかつて自分をいじめていた相田守を見かける――。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

午後の本屋はがらんとしていた。壁が白いせいか、それとも、表の扉が開け放しのためか、なんだか寒々しいくらいだ。克久は迷わずコミックスの棚に進んだ。だれもいないと思っていたのに、コミックスの棚の奥の方で少年が一人立ち読みをしている。克久も同じように目当ての一冊を取り出した。買って帰るつもりが、その場で読み出してしまふ。読み始めると、半分では止まらない。これは全部読んでしまふなと思いつつ半分までは一息にページをめくった。

漫画を読む速さだけは克久にかなわないと父の久夫があきれていたことがある。目玉の動きが全然違うのだ。コマ割りの形から、次のどのコマに進むべきか、瞬時に判断できた。久夫は「これでも昔は速いほうだったんだぜ」なんて言うが、たぶん、少年時代より目玉の運動神経が鈍っているのだ。それに漫画のコマ割り自体も、きつと昔より進歩しているに違いない。ま、漫画を読む速さが自慢にできるなら、克久もだいぶ（A）が高いのだが、あきられることはあつても自慢にはなりそうもなかった。

半分まで読んで、首がぐたびれたから、頭を左右に振って、首筋のコリをほぐした。と、視界の端に、立ち読みをしているもう一人の少年の横顔が引掛かる。

「あれっ」

克久は彼が相田守だったのに、ようやく気が付いた。「あつ」とか「やつ」とか声をかけようかと思つたが、なんだか声を出しそびれた。それに相田も克久がいることに気付いていない。知らない振りをしてコミックスの後半を読み始めると、おずおずした視線が克久のほおをちくりと射した。

あ、こつちを見てると克久は感じたが、目は漫画のコマから上げなかった。最初に声をかけそびれたから、今さら気付いた振りをするのも具合が悪い。①小学校のころの相手を射すくめるような強い視線ではなかったことも、克久には、何だか知らないが、こたえた。

小学校のクラスに君臨していた相田守ならこんなふうには横から相手をのぞくような遠慮がちな視線を送ってきたりはしないのである。克久が「嫌なやつに会ったな」と感じる暇さえ与えずに「おいっ」とか何と声をかけて威圧したに違いない。克久は「②負けたんだ」とコミックスから目を離さずに、最近の相田がすっかり気弱になったことをそう考えた。クラスの中の地位争いの敗者だということであらためて感じ直したのである。

そのうち、ほおをちくりと射す視線が消えたけれども、気配で立ち去った様子がないことは解つた。克久はちらりと相手の方を見た。つまらなそうに、立ち読みを続けている。まるで、そこには他の人間はだれもないような孤独な顔をしていた。コミックスの棚が急に冗舌になったように克久は感じた。背に描かれた漫画の主人公たちが、人間よりも生き生きと、勝手に飛んだり跳ねたりした。克久は相田に声をかける気にもならなかったが、棚の前から立ち去るのも気が引けた。

読み終わった一冊を棚に戻して、次の一冊を手取る。すると、またほおをちくりと相田の視線が射した。こつちを見ていると克久は意識する。自分が見られている間は、絶対に目を合わせないようにした。

けれども、相田がコミックスの方を見ていると、今度は克久が彼を眺める。お互い、別々の世界から相手をのぞき見ているような具合だった。こんなことを五、六度も繰り返したのである。その間にコミックスを三冊も読み終えてしまった。で、ふっと目を上げると、相手もひよいと目をこちらに向けたところで視線と視線がぶつかりつつかつた。それでもやっぱり品物でも見るように相手を眺めていた。二人はそれからまたコミックスを五、六ページも読んだ。目を上げると、また視線がちようどタイミングよく出会う。

「あつ」

「おう」

それが、もしあいさつと言えるものなら、あいさつの声は動物がのどでうなるような声だった。またまた二人は五、六ページほどコミックスを読んだ。三度目に視線が出会ったとき、克久は二歩ばかり相田の方に進んだ。③相田は手にしていたコミックスを棚に戻して、わざと胸を反らす。胸を反らしても、かつての威圧感はずいぶん弱くなった。胸を反らした相田はそのまま、ため息をついた。

相田はため息をついたあとから、小さな、ぼそりとした声で、

「がんばれよ」

と言った。克久には「が」と「ば」と「よ」と「よ」しか聞き取れなかった。まして、相田守の薄い唇からそんな単語が飛び出すとは予想もしなかった。「えっ」と克久が不思議そうに（B）をひそめた。「まったく、面倒臭いな」という表情が相田の切れ長の目のあたりにかぶる。この時だけは、神経戦をわざとしかけてきたころの相田の負けん気がほの見えた。

「全国、行くんだろ」

面倒臭そうに投げ出されたこの一言で、克久にも「が」と「ば」と「よ」が「がんばれよ」だと解つた。相田守は④そそくさと店から出て行った。アズモは自分のクラスのことを水滸がはえた金魚鉢みたいだと言っていた。よほど金魚鉢の緑色の水の中から頭をのぞかせた金魚が「がんばれよ」と言ったみたいだ、へんな感じだった。魚勝のカツちゃんと言う「がんばれ」とはぜんぜん違う響きだけれど、確かに「がんばれよ」と言っていて、皮肉や嫌みの味はひとかけらもなかった。

空が高い。いわし雲なんかも浮かんでいた。

克久は店から出ると、車が行き交う通りの端でしばらく空を見上げていた。⑤空を見上げたいような気持ちになつていた。

【語注】 *1アズモ：吹奏楽部員で、相田守のクラスメイト。
（中沢けい『楽隊のうさぎ』より）

*2魚勝のカツちゃん：魚屋「魚勝」の息子、勝美。克久の幼なじみ。

- 問一 (A) (B) に身体の一部を表す一語をそれぞれ書き入れなさい。
- 問二 ①について、この時の「克久」の心情を説明したものととして、次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。
- ア、自分をバカにし続けていた相田の急な成長ぶりを見て、とても感激している。
- イ、学校から出た途端、気が小さくなる相田の態度を見て、情けなく思っている。
- ウ、荒々しさは消えたが、陰湿さを増した相田の様子を見て、大変警戒している。
- エ、自分をいじめていた相田の変化を見て、しみりとした気持ちになっている。
- 問三 ②「負けたんだ」とは、誰がどのようなことに負けたことをいうのですか。文中の言葉を使って説明しなさい。
- 問四 ③のような行動を「相田」がとつたのはなぜですか。説明しなさい。
- 問五 ④「そそくさと」の意味を答えなさい。
- 問六 ⑤について、どういうことによつて、どのような気持ちになったことをいうのですか。六十字以内で説明しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「テレビ体験」という言葉があるそうだ。自分で何かをするよりも、テレビを見れば、何でもやっておいてくれるので、それを見ただけで体験したような気になり、知識を得た気分になってしまう現象である。しかし、これは実に安直な、いや、安直以下の態度である。

テレビの内側で三十四年間も働いている私が断言するが、テレビは何かをしようと思う触発材料にはなるが、それ以上ではない。その場かぎりの小さな小さな知的体験と言えるかも知れないし、もっと知りたいという気持ちをかき立てられる素材ではあるが、終りのタイトルが出ると同時に、あとには何も残らない。

(a)、読書をしたからといって、そこに書き込まれたすべての知的情報が頭に入ったり、主人公の行動や言語表現が、人生観に影響を与えるものではない。私自身にしても、心を揺さぶられた読書体験は、十代から今日までの四十数年間に、五指とはなない。(b)、あとが無駄になったかと言えば、確証があるわけではないが、(I) のように、読書経験は少しずつ積み重なっている感じが、自分の体の中である。こうして原稿を書くためには、ものごとを考えなくてはならないが、その基礎となるものを草創期から働いているはずのテレビに学んだと言えるのは、個人的には(c) 小さいのである。

君達がこれから生きようとする時代は、①高度に情報化された社会である。情報は単に飛びかっているだけならば、(d) 役に立たないものである。テレビやラジオやステレオをつけっ放しでガンガン鳴らしているようなもので、(e) うるさいだけである。

無数と言える情報の中から、素早く自分に役立つ情報をとらえ、それを総合し、一つの判断をそこに生み出し、その結果が大きな価値を持つ社会である。そこで基本となるのは、単にコンピュータの操作に習熟し、要領のいい人間になることではない。そうしたタイプの人物は、むやみやたらに存在するに違いない。②そこで個性的に生きるコツは、本を片手から離さないことである。活字離れの時代に逆行するようになるが、将来、どんなに社会の様相が変化しても、人間がひとりて判断力を鍛磨する手段は、孤独のうちに作業を続ける読書以外にはないと私は断言したい。

読書とは本とのめぐりあいである。世の中には、その道その道によつて、大成功を収めている人がいる。豪邸の並ぶ一流(あ) ジュウタクガイの表札を見ると、名前を知られている人の表札は実に少ない。この(い) リツパな家の主人は何をしている人のだろうと思うことがある。また、いろいろな社会施設で献身的に働いたり、職人的技術を大成したりしている人など、必ずしもたくさん本を読んでいるわけではないが、自ら選んだ仕事に専心しているうちに、読書以上の体験やもの見方考え方を持っているものである。読書は万能ではない。

だからと言って、読書を放り出してしまふのは大損である。私達人間が一生の間に自分で手近かにとらえることの可能なチャンスは実に少ないものである。くるかこないかわからない機会を待つよりも、まず、②誰しもが均等に持っている機会を有効に生かしたほうが、人生を歩いて行く上に、ずっとトクなのである。

読書とか旅とかはその最たるものである。③趣味はと聞かれた時に、読書と旅行と(う) チョキンですと答えると、それ以上は質問されないがよく言われるが、この三つは誰にでもできることだからである。平凡なのだ。そして、平凡だから、かえって趣味として意識されないのだ。逆にそのことは、③それをつきつめていくと、他の人を超えた意思や実行能力を持つ人と認められる度合いが大きいことにもなる。

人があまりやっていない趣味を持つと、へえーと新しがられるが、理解が追いつけないので、その場限りで終わってしまったたり、場合によっては変人扱いされかねない。私は取材記者から質問されると、いつも読書と旅ですと答えている。チョキンは性格的に不可能なので入れないが、記者はグウの(ヘ) も出ない。

ところが、例えば今、趣味はゴルフですと言う人が何百万人もいるが、ほとんどが三十代ぐらいになってから凝りはじめた人達である。趣味の大部分は、ある程度の生活観が固まってきたり、ゆとりができた頃から始まるが、読書だけは十代から習慣づけたいと、一生自分のものにならないのである。④それは読書が他の趣味と違って、きわめて精神性が高いからであり、十代の純粋な時代に最初の強烈な印象を心に与えておかないと、④本当の読書にならないのだ。

(鈴木健二『男が10代にやっておくべきこと』より)

問一 (あ) (う) について、カタカナを漢字に改めなさい。

問二 ①②の指示語の指し示す内容をそれぞれ答えなさい。

問三 () a k e にあてはまる言葉として、次の中からふさわしいものを一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア、きわめて イ、ただ ウ、では エ、まったく オ、もちろん

問四 () I にあてはまることわざを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、石の上にも三年

イ、一を聞いて十を知る

ウ、チリも積もれば山となる

エ、百聞は一見に如かず

問五 ①「高度に情報化された社会」とありますが、それはどのような社会だと筆者は考えていますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア、情報が情報を生み、どの情報が自分に役立つ情報であるかを判断することが困難な社会。

イ、数多くの情報の中から自分に必要なものを選び、それに基づいて判断して生きなければならぬ社会。

ウ、社会の中に存在するすべての物が情報として扱われ、情報化されない物には価値が認められない社会。

エ、コンピューターの操作に習熟し、要領のいい人間だけが価値を認められる社会。

問六 ②「誰しもが均等に持てる機会」とありますが、これは具体的に何を指しますか。本文中から二字で抜き出して答えなさい。

問七 ③「それをつきつめていくと、他の人を超えた意思や実行能力を持つ人と認められる度合いが大きくなる」と

ありますが、筆者がそう考える理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、平凡なことを趣味とすることで、他の多くの人々と共通の話題ができ、社会の中で孤立することがなくなるから。

イ、平凡すぎて趣味として意識されないことを趣味とすることは、他の人の想像を超えることだから。

ウ、誰にでもできる読書と旅行とチョコキンは、平凡ではあるが、安心して勧められる趣味だから。

エ、誰にでもできることで他人から認められるためには、他の誰よりも深く理解し、努力することが必要だから。

問八 () II にあてはまる語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、足 イ、声 ウ、音 エ、芽

問九 ④「本当の読書」とありますが、それはどのようなものだと筆者は考えていますか。答えなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アメリカとソ連という二つの大国が冷戦で対立していた時期には、*1軍拡競争に計り知れないほどの巨額の資金がつき込まれた。戦車を作れば対戦車砲ができ、①レーダーを作ればレーダーに感知されないステルスという飛行機ができる。昔から、軍艦を作れば潜水艦ができ、潜水艦ができればそれを探知する海中レーダーができ、という具合にずっと続いてきた。

宇宙探査、宇宙航空開発も、まさに冷戦を背景とした軍拡競争の一部であった。ソ連が人工衛星を飛ばせばアメリカも飛ばす、ソ連が有人飛行をすればアメリカも有人飛行をする、ソ連が*2ソユーズを出せばアメリカは*3アポロを出すという具合で、大量の資金が使われ、その資金は国民の税金で賄われた。その結果、われわれの毎日の暮らしに役立つものとしてなってきたかといえ、汗は蒸発させるが雨水は通さないゴアテックスの雨合羽と、卵焼きでもパンケーキでも決してくっつかないというテフロン加工のフライパンだけだというのは陳腐な冗談だが、つき込まれた資金の莫大さは確かに冗談ではない。

このような軍拡競争は、生物の世界にも **A** に存在する。それは、生物どうしがいろいろな競争状況にあるからだ。一歩でも相手を抜き抜いたほうが生き残れるときには、そのような遺伝的変異を持った個体が有利になるだろうが、同時に、相手も **B** を抜き抜くことができる。④そちらのほうが有利になる。そこで、両方の生物に対して、はてしない変化の連続の可能性が出てくる。

たとえばカッコウという鳥と、カッコウに寄生される鳥を考えてみよう。カッコウは、自分ではヒナの世話をせず、ウグイスなどの他種の鳥の巣に卵を産み込み、その種に世話をさせる。そんなものを引き受けさせられたほうは困ったものなので、カッコウを追い払う。そこで、カッコウは、非常に巧妙に卵を産み込む手段を開発する。まず、宿主の鳥のいないときを見計らって、その鳥の卵を一つ放り出し、そこへ自分の卵をあつという間に産み付けるのだ。

帰って来た宿主の鳥が卵を見分けられずに受け入れてしまうと、②たいへんなことになる。カッコウのヒナは、宿主のヒナよりもひと足先に卵からかえり、まだ目も見えないうちに、宿主の卵を一つずつ背中にのせて巣の外に放り出してしまふのだ。こうして自分だけになったカッコウのヒナは、宿主の親鳥の世話を一身に受けて大きく育つ。

そこで宿主の鳥としては、卵を見分けたほうが自分のためだ。実際、いくつかの種では、カッコウの卵を見分けて放り出す。ところが、カッコウもそれに対応して宿主の卵と酷似した卵を産むようになり、見分けるのはますますむずかしくなる。事実、異なる種の宿主に寄生しているカッコウどうしは、まったく異なるタイプの卵を産む。

これは、進化的軍拡競争の **B** な例だ。③現在のところ、カッコウのほうが勝って、一歩先をいつていることのほうが多い。なぜ

なら、多くの宿主はカッコウの卵を見分けられないからだ。しかし、見分ける種もあるということは、見分けるような遺伝的変異が出てきさえすれば、宿主のほうが勝てることを示している。

ところで、カッコウのヒナは巨大である。宿主の親の数倍になることもある。こんなお化けのように大きい子を、宿主はなぜ見分けられないのだろうか。一つの理由は、カッコウのヒナの鳴き声にある。これを録音して調べたところ、カッコウのヒナの鳴き声は、宿主の本来のヒナの一腹分、すなわち五羽か六羽の全部が一斉に餌ねだりをしている声にそっくりなのである。

もう一つの理由は、宿主側の*4リスクと進化の制限要因にあるようだ。自分のヒナとカッコウのヒナとをどうやって見分けるか。卵なら、自分の卵とカッコウの卵を同時に比べることができると、カッコウのヒナは、他のヒナを放り出してしまふので、巢の中にはそれ一羽しかない。しかも、ヒナの段階になってから、もしも識別を誤って自分自身のヒナを拒否することが起こると、それは宿主にとっては大いなる損失である。そこで、宿主は中途半端なヒナの見分けはしないほうがよい。Cに考えればヒナを見分けたほうがよいが、そういうことは進化で出てこなかった制限要因があるのだから。

いずれにせよ、現時点で、この軍拡競争ではカッコウのほうが勝っている場合が多い。その一つの理由は、カッコウにとってのほうが、宿主にとってよりも事態が切迫しているからである。ウグイスなどの宿主の鳥自身にとって、自分がカッコウにやられるチャンスは一生のあいだに二度とはないくらいだ。ところが、カッコウ自身にとっては、毎回の繁殖が成功するかしないかがすべて、騙しに成功するかどうにかかっていることになる。

そこで、進化的軍拡競争がどうなるかは、双方にとっての代替戦略の余地がどれほどあるかということと、④どちらにとって失うものが大きいかに依存することになる。さて、国際社会の軍拡競争は、どういう原理で動いているのだろうか。

(長谷川真理子「科学の目 科学のこころ」より)

【語注】 *1軍 拡：軍備拡張の略語。

*2ソユーズ：ロシアがソ連時代から打ち上げている宇宙船。

*3アポロ：米国の宇宙計画で使用された宇宙船。

*4リスク：損害を受ける可能性。

問一 ———— ⑦・⑧の指示語の指し示す文中の言葉をそれぞれ抜き出さない。

問二 A C にあてはまる言葉としてふさわしいものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア、典型的 イ、合理的 ウ、先天的 エ、日常的

問三 ———— ①「リーダーを作ればリーダーに感知されないステルスという飛行機ができる」とありますが、「カッコウ」と「ウグイス(などの宿主)」の「競争」において、これとよく似た事情を示すことがらとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、カッコウが卵を産み付けようとするとウグイスが追い払う。

イ、カッコウがすきをつけてウグイスの巢に卵を産み付ける。

ウ、カッコウが産み付けた卵をウグイスが見分けて巢から放り出す。

エ、カッコウがウグイスの卵と非常によく似た卵を産み付ける。

問四 ———— ②「たいへんなことになる」とはどういうことになるのですか。わかりやすく説明しなさい。

問五 ———— ③「現在のところ、カッコウのほうが勝って、一歩先をいつていることのほうが多い」とありますが、この理由を二点答えなさい。

問六 ———— ④「どちらにとって失うものが大きい」とありますが、「ウグイス(などの宿主)」との「競争」において負けた場合、「カッコウ」は何を「失う」ことになりますか。わかりやすく説明しなさい。

問七 この文章の題名としてふさわしい十字以内の語句を、本文中から書き抜きなさい。